

明治期における児童博覧会について(2)

是澤優子

(平成8年9月30日受理)

A Study of "Child Exposition" in Meiji Period (2)

Yuko KORESAWA

(Received September 30, 1996)

はじめに

明治から大正にかけて、様々な博覧会が全国各地で催された。なかでも明治後期には、児童教育の必要性や家庭教育への関心の高まりを受けて子どもをテーマとした「児童博覧会」が開かれている。

これらの博覧会は、「児童文化」という概念が一般民衆に浸透する以前の日本に於いて、啓蒙的な役割の一端を担っていたのではないだろうか。

そこで第1報では、明治39(1906)年に開催された日本最初の「こども博覧会」(教育学術研究会主催)の概要を報告した。¹⁾ これは全国各地で開催される児童博覧会の先駆けであった。そして、この博覧会を継承発展させたのが、三越の児童博覧会である。これがのちの児童博覧会に、大きな影響を及ぼしたと思われる。

そこで、本稿では以上のような問題意識にたつて「三越児童博覧会」の概要を振り返ることで、考察をすすめていきたい。

1. 子どもへの関心の高まり

明治30年代になると、幼児教育や家庭教育が一般市民にも注目されはじめ、子どもの発達や教育に玩具が結びついていることが一部の人々に意識されはじめる。²⁾

明治39(1906)年の「こども博覧会」はこのような状況のなかで、子どもの生活や教育環境の向上を目指して開かれたものであった。

すでに、明治40年頃には「家庭ノ研究ハ数年来一種ノ流行タリシ観アリキ」³⁾ 時代となり、家庭教育の必要性

を意識する人々の範囲も拡大していた。即ち、玩具を始めとする子どもの生活用品全般にまで、社会の関心が集まる土壌が形成されつつあったのである。⁴⁾

三越が「子ども」に注目しはじめるのも、この頃である。

2. 三越呉服店の新経営方針

時代が江戸から明治に移り、欧米に追いつこうとする動きのなかで、従来の呉服店も近代化の必要に迫られてくる。明治38(1905)年1月2日、三越呉服店は主要新聞紙上に「米国のデパートメントストアの一部を実現可致候事」という広告、いわゆる「デパートメントストア宣言」を出し、新たな営業方針を表明した。当時の三越の重役室には伊藤博文など政府高官、将軍、俳優、学者、などが出入りしサロンのような活気があり、日比翁助(当時の三越呉服店専務取締役)は、これらの人々をプレーンにして芸術文化的な広報活動のスタイルを打ち立てようとしていた。そして、流行・文化発進基地としての百貨店を目指し、各種の事業が企画された。そのひとつが「三越児童博覧会」である。

前述の「こども博覧会」に、子ども服などを出品していた三越呉服店は、明治41(1908)年3月に「小児部」を開設し、子どもの生活用品の充実及び販売拡大に本格的に乗り出す。

さらに明治42(1909)年2月には、「こがね丸」などのお伽噺や口演童話で名声を博していた巖谷小波を「小児部」の顧問に迎えた。そして、子どもに焦点をあてた児童博覧会を催すのである。

当時の三越の広告雑誌『みつこしタイムス』には、次のような記述がある。(但し、かっこ内は筆者)

* 児童文化研究室

常に流行界の革新を図りて、一新機軸を出すことに苦心しつつある本店にては、(上半期に数々の事業を催すべき予定であるが)中にも児童博覧会は、従来各所に催されしものとは全くの面目を異にし、…娯楽と趣味を兼ね備えたる点に於いては、他の小児博覧会の上に一頭地を抜きて紅塵深き市井の間に、一大楽園を現出せんとするなり。⁶⁾

ここからも、三越が児童博覧会にいかにか力を入れていたかがわかる。

児童博覧会の審査員のひとりであった菅原教造(文学士)は、「近世の小売営業法でもっとも新しく、最も進歩しているデパートメントストアの制度の型は、実は博覧会のやり方に過ぎないのである。」「三越に児童博覧会の出来たというのは、この方面に基づいた営業法の研究から見て、非常なる進歩と思う。」と述べている。⁶⁾さらに、児童博覧会の大きな意義は、大人には子どもの教育の重要性を認識させ、子どもには教育上の利益を受けられるようにすること。また、専門家は、子どもに関する研究、子どもの生活に関係するあらゆるものの現状などを知ることができるとして、教育的意義を最も重要なものとして説いている。

一方、経営者側の日比翁助は、児童博覧会について「健全な国民となるべき児童を養成するに必要な玩具の改良をしたいので、決して自家の広告ではない」⁷⁾と述べている。最も、これが販売促進につながるという計算もはたっていたのであろう。日比は「児童」というテーマが、三越の顧客のニーズに答えることを見抜いていたのかもしれない。

3. 明治期の「三越児童博覧会」について

(1) 「三越児童博覧会」の概要

三越は、明治42(1909)年4月の第1回を皮切りに大正3(1914)年までは毎年「児童博覧会」を開いている。ここでは明治期に開催された第1回から第4回を中心に見ていく。

これらの博覧会は、児童に関する各方面の研究調査、改善発達の進歩を見るためには製作品を一所に集めて広く紹介する事がもっとも適当な方法であり、日頃子どもの生活に欠くことの出来ない「衣服、調度、及び娯楽器具類」や「特殊の新製品」を広く募って「明治今日の新家庭中に清新の趣を添えんこと」を期待して開設された。

そして、次の様な出品物を募集していた。⁸⁾

- 1) 玩具, 人形, 遊戯一切.
- 2) 児童に関する図書, 絵画, 写真, その他印刷物.
- 3) 和洋児童服及び付属品一切.
- 4) 帽子, 靴, 下駄, 草履及び付属品.
- 5) 少女用小間物, 化粧品及び造花類.
- 6) 洋傘, 袋物その他児童携帯品一切.
- 7) 乳母車その他乗物類.
- 8) 学校用品及び文房具類.
- 9) 体育運動具.
- 10) 児童用椅子, 卓子その他什器類.
- 11) 和洋楽器及び付属品.
- 12) 児童に関する菓子及び食料品.
- 13) 動植物, 地理等の標本.
- 14) 建物, 機械, 船舶, 武器等の模型又は標本.
- 15) 保育用及び教育用器具.

上記の通り、子どもの生活に関係するあらゆるものを対象としていたことがわかる。また、出品中新考案の製作品の中で優秀なものには、記念品を贈呈している。これは、明治39(1906)年の上野「こども博覧会」には、見られないことであった。

審査には、下記の通り会長顧問以下12名があたった。従来の児童博覧会では、審査員は男性ばかりであったが、子どもと最も密接な関係がある女性の意向をくみ取るために、高等女子師範学校教授宮川寿美子を加えている。

会長	日比翁助
顧問	巖谷小波
審査員	新渡戸稲造 高島平三郎 坪井正五郎 坪井玄道 塚本靖 中村五六 黒田清輝 斯波忠三郎 三島通良 菅原教造 小野喜惣治 宮川寿美子

(2) 「三越児童博覧会」の趣向、構成

それでは児童博覧会では、どのような趣向が凝らされていたのだろうか。以下、回をおってその具体的な流れを紹介する。

① 第1回児童博覧会(明治42年4月)

スイスの「ルツェルン湖」を模した大風景絵を飾り、

会場を美術、教育、建築、体育、服飾、工芸、尚武、機械、外国、園芸、動物、参考の12部門にわけて陳列展示を行った。これとは別に協賛会の展示も設けられていた。

顧客誘引や店内のムードづくりを目的に編成された三越少年音楽隊15名による初演奏。お伽芝居、神楽、手品、子ども曲芸等の余興。中庭には、熊、猿、犬、猫、各種の鳥類のいる動物園が設けられていた。(図1・図2)

また、児童博覧会開設を記念して6月に、子どもの成長を記録する育児日誌「子實」を作成。2000部を定価五円で限定販売した。編集は巖谷小波、図案は杉浦非水(三越の専属図案家)であった。

西	東
同同同同前小關大 頭結脇關	同同同同前小關大 頭結脇關
花 賽 體 機 尙 少 帶 育 念 械 井 年 動 物 館 念 館 武 九 音 物 と 館 給 の の 模 沈 樂 熱 帶 動 物 車 艦 懸 樂 物 模 型 藝 書 艇 額 隊	藝 小 食 大 廣 動 鳥 禽 堂 瀨 プ の 店 園 名 中 エ の の の 子 行 ル 噴 小 除 余 親 物 水 兎 時 典 列 筆 湖
同同同同同同同前 頭	同同同同同同同前 頭
自 越 鉛 帽 能 働 童 筆 子 樂 電 雪 合 形 鈴 式 話 齒 磨 雜 飛 光 室 の 發 筆 羅 ん 模 の 設 賣 箭 筆 ロ 玩 樣 置 入 筒 入 具 衣 裳	投 貨 世 千 尙 少 書 店 界 代 形 武 年 函 の エ ビ 紙 日 館 の の エ ビ ッ ク と 傘 軍 紙 の プ ロ 立 テ 草 帽 及 設 テ ー 履 袋 鉛 置 ン 函 紙 袋 版

図2 『みつこしタイムス』臨時増刊 第7巻第8号より

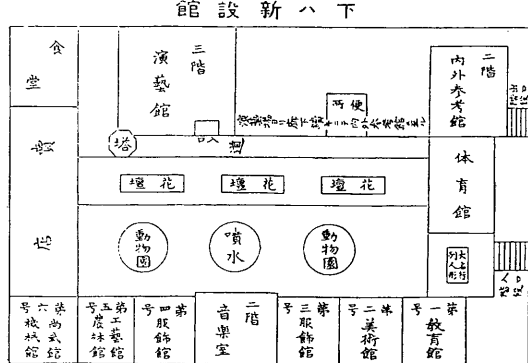
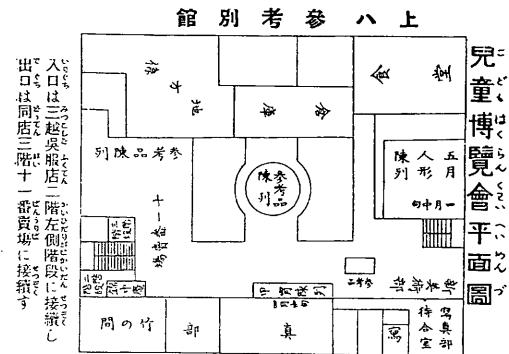


図1 『みつこしタイムス』臨時増刊 第7巻第8号より

② 第2回児童博覧会(明治43年4月)

「正門の高さ実に三十有餘尺、之に乗せたる大桃は高さ二十尺、門と桃とその上の巨人とを合すれば六十餘尺」に及び、「門とその左右一町餘にわたる塀とは、いづれも鬼ヶ島の楼門をそのままに擬したるものにして、桃太郎氏が此の將と仰げる。」⁹⁾

陳列場には、教育、保育、服飾、遊戯などに関する物や懸賞応募の選書とお伽話選画が飾られていた。陳列場を出ると富士山の全景を配した花園があり、そこには箱庭、噴水、あずま屋が設備されていた。「児童諸君は天井に科学の進歩を実地に学び、地下に動物学の知識を嬉戯に得られるべし」¹⁰⁾というように、木々の間に十数種の猿とその足元に幾百の蟹の群れ。花園には犬、池には亀。天井からは飛行機が下げられていた。

三階の停車場より東海道観覧汽車が走り、また同階の参考館には、世界各国の玩具、教育、保育、服飾等の珍品、懸賞募集した幼児生育状態の写真、名家の幼時の写

真や作品等が飾られていた。二階には食堂があり、ここでは猿蟹合戦のおむすび、柿の種菓子、きび団子、にぎり寿司、ちらし寿司、金時等のメニューが用意されていた。(図3)

③ 第3回児童博覧会(明治44年3月)

三越の地下から貝殻の化石が出た記念に、海をテーマに、龍宮城の楼門に模した正門、龍宮城を舞台にした余興など、龍宮を博覧会のシンボルとしていた。

陳列場は、保育、教育、服飾、玩具の4部門に分かれていた。参考室には、児童服飾物を中心に児童教育に必要な参考品が展示されていた。懸賞募集切紙貼絵の課題も海にちなみ、1年<日の出>、2年<亀>、3年<鯛>、4年<軍艦>、5年<波の図案>、6年<龍宮>であった。また、海に関する「趣味と知識を涵養」する絵本「ウミノイロイロ」「ウミノリョウ」「ウミノオトギ」「ウミノコドモ」「ウミノヒト」を発行した。

④ 第4回児童博覧会(明治45年5月)

会期が節句に重なったこともあり、金時と熊、桃太郎の鬼退治の人形を飾りつけたお伽門。入口正面には神宮皇后三韓征伐凱旋の人形を置くなど尚武的な装飾と趣向を凝らしていた。

参考室は、子ども年中行事というテーマで、各月の行事にちなんだ国内外の人形玩具を展示した。懸賞募集自在画(絵画)の課題は、低学年は風景、高学年は動植物で応募総数1204枚であった。

各回とも、会場は主として陳列場、売店、参考室、余興場、食堂等の設備から構成され、入場者が楽しんで見て回れるように趣向を凝らしていた。また、毎回子どもを対象とした懸賞募集を企画し、審査ののち優秀なものは児童博覧会会場に飾られた。そして、三越少年音楽隊の演奏も、児童博覧会には欠かせないものであった。

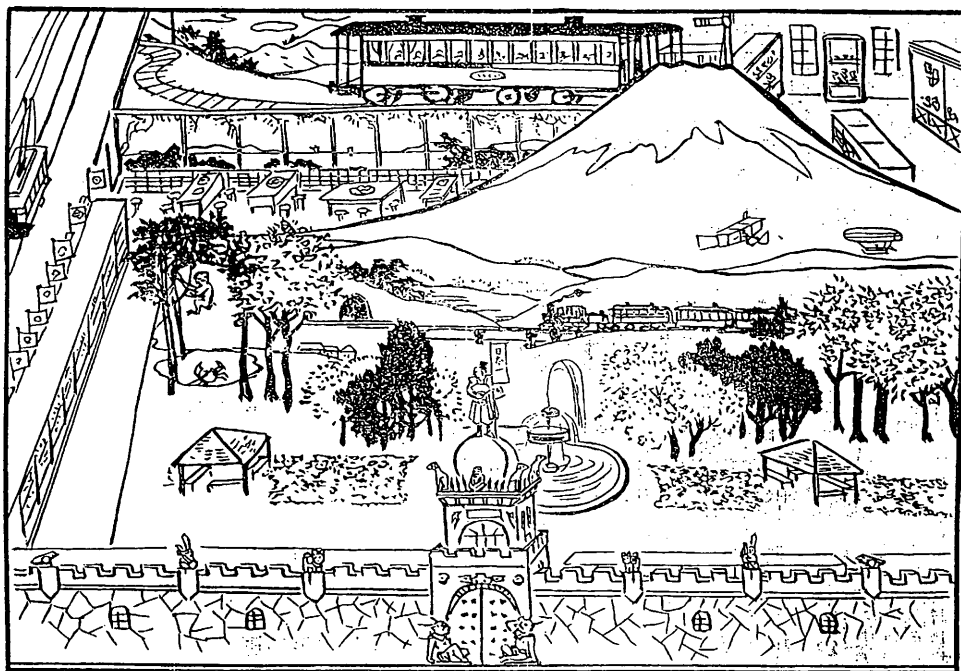


図 繪 會 覽 博 童 兒

図3 第2回児童博覧会
『みつこしタイムズ』第8巻第4号より

(3) 審査について

出品、入賞は表1の通りである。出品総点数、出品者数ともに年々増加している。

審査員菅原教造は、第1回目の審査後「何しろ博覧会の中心が児童であるから、審査員に児童の研究者がいたのと、我が国特有のやかましい審査方針とに依って、審査は非常に厳密であった。」と述べている。¹¹⁾

表1 三越児童博覧会出品入賞累計

開催年	出品総点数(点)	出品者数(人)	受賞者数(人)
第1回明治42年	17,854	273	185
第2回 43年	26,223	296	164
第3回 44年	34,062	344	175
第4回 45年	34,610	348	206
第5回大正2年	23,538	230	171
第6回 3年	23,376	239	174
第7回 4年	37,493	371	197
第8回 7年	25,521	241	144
第9回 10年	57,777	560	186

『三越』第11巻9号より

また、三島通良(医学博士)は「現在世にある児童用品の状況を、識るに足るだけの多数の物品を、一時に審査する事が出来た」こと、また、出品された物の中には、品質、製作、考案等に出色したものや進歩したものがだんだん増えてきたことを喜ぶと同時に、「全く旧のままで、少しも進まぬもの多いのにも驚いた」と言っている。¹²⁾ また、それらの欠点は、児童用品を製作販売する実業家が児童の「生理、衛生、教育、心理等」のことをわかっていなかったためであり、それぞれの立場から子どもの研究をしている学者たちの知識が「常に子供の使用する物の製作上に応用」されるようになれば、「国の経済上にも、また商工業の発展上にも決して少なからぬ利益があろうと信じ」いと述べている。¹³⁾

また、高島平三郎(日本児童研究会幹事)は、子どもの生活用品を製造販売する人々に対して、七つの観点をあげ、以下のように要求をまとめている。¹⁴⁾

- 実用 簡単なること便利なること
- 教育 精神の発達を助くること
品性の修養を助くること
- 衛生 身体を害せざること
病毒媒介の処なきこと
- 運動 運動を妨げざること
各部の運動に適すること
- 経済 値の安きこと
堅牢にして久しきに耐えうること
- 審美 色彩、形状、模様等の注意
児童の趣味に基くこと
- 技術 巧みなること
眞を失わぬこと

更にまた、高島はいづれも子どもの心身の発育程度に応じて物品を選ぶことを提言している。

尚、児童博覧会開会式などにおける審査員の演説のうち、その半数が玩具に関する話であった。このことから児童用品の中でも殊に、玩具が注目されていたことがわかる。¹⁵⁾

このように、たくさんの児童用品を展示することで子どもの生活用品や玩具等の欠点や製作上の問題点が明らかになり、児童用品改良の必要性、とりわけ製作者や業者が児童研究の専門家と協力する(いわゆる「学俗協同」)ことで「児童本位」の改善を進めることが意図されていた。

また、このような考え方は、三越の新経営方針と一致するものでもあった。そしてこの姿勢をより具体化する組織として「児童用品研究会」が誕生する。

4. 「児童用品研究会」について

(1) 「児童用品研究会」の概要

明治42(1909)年5月11日、「三越児童博覧会」の審査員が集まった折、三島通良、高島平三郎、菅原教造、巖谷小波が発起人となり設立したのが「児童用品研究会」である。そして、翌6月、3回の会合が開かれ7月には次のように規定が決議された。¹⁶⁾

児童用品研究会規定

一 目的

学術上及び実用上より研究を成し一般児童用品の改良普及を計るを以て目的とす。

一 事業

- (一) およそ児童を本位として製作したる器械器具及びこれらに関する図書を集める事。
- (二) 新たに考案創作をなし或いはこれを助勢し若しくは奨励する事。
- (三) 善良なる児童用品を社会に推奨し且つこれが普及を助くる事。
- (四) 上記の目的を達するため需要者または供給者の商議を受け或いは監査をなす事。

会員

三島通良, 菅原教造, 高島平三郎, 巖谷小波
(以上四名幹事)
新渡戸稲造, 黒田清輝, 塚本靖, 小野喜惣治,
坪井正五郎, 坪井玄道, 斯波忠三郎,
宮川寿美子

規定にあるように、この研究会は、児童用品の研究、改良、普及につとめ、例会は8月以外の毎週水曜日に開かれた。

巖谷小波は「…博覧会が唯一時的なものでないようにする為に、児童用品研究会というものを作って、平素といえども児童に対する用品の各方面の研究を続けていきたいものである。…この会は永遠に続けて参り、毎週一回ずつ、単に玩具とか保育具というもののみならず、食用品というものまでも研究することになって居ります。」と、述べている。¹⁷⁾

児童用品研究会会員の殆どが児童博覧会審査員であることから「児童用品研究会」は三越呉服店、特に「三越児童博覧会」に密接に関連していた。しかし、その活動はそこにとどまらなかった。

(2) 「児童用品研究会」の活動

ちなみに明治42(1909)年、「児童用品研究会」が発足した年には、新案玩具の募集、審査、分類、陳列、「第2回三越児童博覧会」のための書画募集、伝承玩具の再興、新案玩具の製作、諸種の遊戯や玩具の研究等の活動を行っている。尚、募集した新案玩具のうちすぐれた物

は明治42(1909)年12月1日より三越に於いて開催された第1回万国玩具展覧会に陳列された。

「児童用品研究会」は、玩具を中心とする子どもの生活用品の収集、審査批評、また各地の博覧会展覧会等からの要請にこたえて各種参考品の貸出を主な活動としていた。ここでは、審査批評、参考品の貸出を中心に児童用品研究会の活動の実情を探る。

例会での審査批評は、博覧会の出品物だけでなく会員の考案物や個人、業者から持ち込まれたものなどにたいしても行っていた。明治44(1911)年9月から45(1912)年3月までの間、審査批評の対象になった主な児童用品は下記の通りである。

明治44(1911)年9月から12月

組み立て玩具、神楽鈴、縮緬細工の弥次郎兵衛、玩具組木家具、貯金箱、丸山式飛行機、洋装人形、滑走電車、兎と亀の独楽、教育戦闘兵棋、組み立て電車、模型電車、笙の笛、「ダルマ玉投げ」、和製自動車、吹奏オルガン、玩具江戸の鼠、住吉の鼠、梯子人形、紙細工玩具各種、各種風俗其他似顔挿絵羽子板、歌留多類、関ヶ原合戦、新案輪投げ、自動体操玩具、舶来玩具、ドイツの文房具、日本歴史画帳、石版刷絵本30冊、オシメカバー、小児用マント、子供用帽子の色彩、縮緬性ガラガラ、象牙のおしゃぶり、象牙のガラガラ、つげのおしゃぶり、「寝冷不知」、外国製子ども寝衣、女子のゲートル、子供用下襦袢と股引、涎掛けなど。

明治45(1912)年1月から3月

新案玩具土俵付き相撲人形、活動ブック、教育カード、自動絵本、活動変わり絵、変画鏡、覗き眼鏡、セルロイドラップ数種、南極探検記念ペンギン島、活動写真、活動観覧車、動く鳩、フランス玩具数種、装飾具、三越特製雛人形、たたみ込み弁当箱、筒形罎、教育地球儀、室内ボール、奉書細工の象、ガラガラオシャブリ、絵はがき絵合わせ、体操点取り遊戯、オルガン独楽、切紙貼絵など。

例会で審査批評されたものを見てみると、人形玩具(国内、海外、郷土玩具、新案玩具など)、図書、文房具、運動具、衣類、保育用品など、いわゆる児童だけではなく乳児が使用する生活用品をも対象に考えていたことがわかる。

明治期における児童博覧会について(2)

さらに、明治45(1912)年6月に、玩具研究の成果として「オモチャ会」を設立。会員を募り一年間にわたり毎月玩具を配付し「家庭の健全なる訓育娯楽に貢献」¹⁸⁾しようとした。また、会員の子どもや、保護者向けに講演会なども催した。

(3) 各地の博覧会展覧会とのつながり

明治43(1910)年から45(1912)年の参考品の主な貸出先は次の通りである。

明治43(1910)年

女子大学秋期大会
長野新聞社主催児童博覧会
島根県教育展覧会
高知市教育展覧会

明治44(1911)年

愛知県西尾小学校の教育展覧会
第2回大阪こども博覧会
名古屋児童用品陳列会
秋田県教育展覧会
松江島根県子供博覧会
福井市教育品展覧会
大阪箕面山林こども博覧会
神戸新聞社の須磨こども倶楽部
石川県能美郡玩具連合展覧会
島根県那賀郡教育展覧会
愛知県岡崎町教育玩具展覧会
学習院女学部記念会
日本児童研究会学術講演会など。

明治45・大正元(1911)年

岡山児童博覧会
東京通俗心理講演会
名古屋第2回児童博覧会
鳥取山陰学芸品展覧会
米子学芸大会
大阪三越玩具展覧会
東京女子大学校
東京女子高等師範学校フレーベル会
那覇区教育展覧会
島根県能義郡博覧会

東京教育品研究大会
弘前教育品展覧会
内務省感化救済事業講習会
日本児童学会総会など。

また、国内だけでなくドレスデン衛生博覧会(明治43年)にも「児童用品研究会」より日本の玩具を出品している。しかも、各地の児童博覧会関係者も「あたかも本会を中央機関の如く訪問」¹⁹⁾したという。参考品の貸出や地方の博覧会、展覧会とのつながりをみても、全国の児童博覧会の手本となっていたことが推測される。この時期各地で開かれた博覧会の中心的存在として「三越児童博覧会」がその位置を保ち続けられたのは、「児童用品研究会」によるところが大きいのといえよう。

おわりに

明治41(1908)年に「小児部」を開設した三越呉服店は、明治42(1909)年2月に巖谷小波を顧問に迎え、同年4月「第1回三越児童博覧会」を開催した。児童博覧会は盛況であったが、子どもの使用する生活用品や玩具等の欠点明らかになり、児童用品を研究改良する必要性を感じた審査員たちは、「児童用品研究会」を組織した。

その具体的な活動は、玩具を中心とする児童用品の収集、審査批評、参考室(玩具、保育品、子供服など)の展示、また各地の博覧会展覧会からの要請にこたえた各種参考品の貸出などあらゆる方面に及んでいる。そして、その研究成果を「三越児童博覧会」に活かし、また、各種児童用品に対する博覧会での評判を、三越の子ども用品売場に反映させていた。つまり、この研究会は、三越児童博覧会開催のための基礎的研究の役割を担っていたのである。

「児童への関心の高まり」を受け展開されたこれらの活動は、子どもの生活に関するものを広く視野に入れていたが、その中でも特に、玩具の改良、考案に力を注いでいた。そのことは、児童博覧会における審査員などのスピーチや「児童用品研究会」の活動等からうかがうことができる。

家庭教育の重要性が浸透しはじめた明治の家庭において、「遊びながら学ぶ」ことのできる玩具は、子どもの教育上(学校教育とは違った意味で)関心が高かったものと推察される。「児童用品研究会」における玩具改良も、まさしく「教育的」な視点が重要視されたいた。し

かし、本稿ではそれを深く検討できなかつた。玩具を始めとする児童用品について、児童博覧会や「児童用品研究会」がどの様に改良普及をすすめたかは稿を改めて論じたいと考えている。

もっとも、当時の三越の児童用品は「貴族若くは富豪向きで平民的なもの」は少しもなく、大多数の子どもたちには手の届かないものであった。また、自社の広告雑誌で「学俗協同」をピーアールすることにより、三越の商品に対する信頼性の向上やイメージアップに一役買ってもらい、販売を促進しようという目論見があったと思われる。²⁰とはいえ、児童博覧会がきっかけとなり児童用品の質的な見直しがなされ、改善に結びついたことは事実である。流行・文化の発進基地としての百貨店を目指した三越呉服店を舞台とする一連の児童博覧会および児童研究が、一営利企業の枠を越えて、子どもの生活文化・児童教育の啓蒙において果たした役割は決して小さくないであろう。

明治42(1909)年に組織された「児童用品研究会」は、大正12(1923)年まで継続され解散した。いづれにしてもその間、「児童用品研究会」が玩具を初め各種児童用品の改良普及に取り組んだことで子どもの日常生活用品をはじめ玩具、図書などが主に専門的な立場から見直され、日本の児童用品の進歩に貢献したことは評価されるべきであろう。

註

- 1) 是澤優子「明治期における児童博覧会について(1)」東京家政大学研究紀要第35集(1) 1995
- 2) 是澤博昭「幼児教育普及に伴う玩具観の変容」『児童研究』第74巻 日本児童学会 1995
- 3) 中村五六・後藤牧太「東京勸業博覧会審査報告巻一」『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料156』明治文献資料刊行会 P17 1975復刻
- 4) 是澤博昭・是澤優子「教育玩具の時代—児童文化誕生前史—」『かたち・あそび』第7号 日本人形玩具学会 1996
- 5) 『みつこしタイムス』第7巻2号 P28 1909
- 6) 菅原教造「児童博覧会感想」『みつこしタイムス』臨時増刊 第7巻第8号 PP141-142 1909
- 7) 『三越』第1巻4号 P3 1911
- 8) 「児童博覧会規定」『みつこしタイムス』第7巻3号 1909

- 9) 『みつこしタイムス』第8巻4号 P2 1910
- 10) 同上 P8
- 11) 菅原教造「児童博覧会感想」前掲書 P150
- 12) 三島通良「児童用品の製作販売に関する所見」『みつこしタイムス』臨時増刊 前掲書 P124
- 13) 同上 三島通良「国家経済及び商工業と児童」P72
- 14) 同上 高島平三郎「児童研究と玩具の製作」P74
- 15) 高島平三郎「児童研究と玩具の製作」、新渡戸稲造「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」「玩具製作者に望む」、坪井正五郎「子供に関する注意の進歩」、三島通良「国家経済及び商工業と児童」「眼で見る玩具と手で持つ玩具」、小野喜惣治「玩具製作者に望む」、坪井玄道「子供は何でも壊したがる」、斯波忠三郎「ヨットの玩具を奨励せよ」
- 16) 「児童用品研究会規定」『みつこしタイムス』第7巻9号 1909
- 17) 『みつこしタイムス』第8巻6号 P8 1910
- 18) 『三越』第3巻1号 P12 1913
- 19) 『三越』第2巻1号 P9 1912
- 20) 三越の広告雑誌『三越』第2巻3号(明治45年)には「三越の学俗協同絶えず学者の知識を借り、之を俗人が運用の才を以て実行するは、是れ当店が日夕力めつつある所…」
また、同年の『みつこしタイムス』第10巻8号にも「児童博覧会の如きも、店内に児童用品研究会という学者の団体ありて、その指導によって開催し、その学者たちは毎週1回店内に集まりて、玩具、服飾、児童に必要な物を研究」しているという記事が載せられている。さらに、大正3年以降のものと推定される『三越呉服店御案内』にも「新しき商売は新しき知識を要します。三越呉服店はあらゆる方面に、知識高く経験深き 学者専門家の指導を乞い、其高き意見に従って、それを実行に現すことにつとめております。されば三越はいかなる商品を作るにも、必ず斯導の学者について、十分の研究を乞い、其後に売り出すように致して居ります。」と記されている。

明治期における児童博覧会について(2)

参考文献

- ・山口昌男 『敗者の精神史』 岩波書店 1995
- ・『株式会社 三越85年の記録』1990

付 記

- ・人名及び引用した文章は、一部現代仮名遣い、当用漢字に改めたところがある。